

相模大磯町愛宕山横穴調査報告

中 川 成 夫

は し が き

昭和二十九年六月、本学と関係の深い神奈川県大磯町エリザベスサンダースホーム園長沢田美喜女史より、園内にある横穴が小学校敷地拡張工事により破壊される恐れがあり、事前に調査されては如何と云う好意的な通知を受けた。官本教授と私は早速六月中旬、学生五名と共に同園に赴き、現状を見て七基の横穴の存在を確認したが、それらはすべて既に盗掘開口をしてはいるが、潭滅前に内部を清掃し学術的に記録を残しておく必要を認め、調査した旨を沢田女史にお伝えした処、直ちに快諾され、宿舎・炊事・発掘器具等の援助を約された。官本教授は帰学後、直ちに大学当局と折衝され、その結果これを本学史学科の調査事業の一として行う事とし、文化財保護法による書類を複製、同委員会宛に提出すると

共に、予定の調査期日について時日も切迫しているので神奈川県教育委員会・文化財保護委員会記念物課の了解を求め、かつ神奈川県文化財専門委員赤屋直忠氏の指導参加を要請し、六月廿八日―七月二日の間これを実施した。従つて本調査は以下に述べる如く、既往の知見に何等差し加うべき新事実は見出し得なかつたが、前記沢田女史の物心両面の御援助、大学当局、史学科諸教授の理解ある後援、併せて参加された学生諸君の極めて熱心な作業により行い得た文化財保護法施行後の本学最初の野外考古学実習である事を冒頭に記し、発掘担当者として深甚な謝意を表するものである。また諸般の都合で直接調査に参加されなかつたが、調査終了後も種々学術的に御教示を得た前記赤屋直忠、大磯町教育委員会鈴木昇の両氏及び調査中、学生の指導を分担して頂いた史学科手塚隆義教授、東京大学大学院人文科学研究科考古学科学

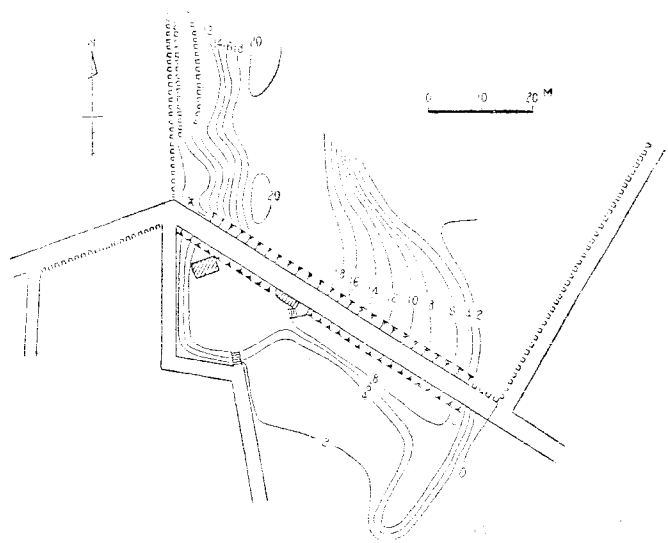
生加藤晋平君にも深く謝意を表する次第である。

調査の経過

六月廿八日九時二一分、宮本教授、中川・学生八名東京駅出発、十一時宿舍子供供舎館に入り、午後一時先ず襦袢を捧げて作業開始、I・II号横穴内の土砂の排出作業を行う。I号は既に開口し、内部にレンガ・おろく・石瓦用材等が持ちこまれ、最近まで何人かが住んでいた形跡があつた。これらを排出すると床面近くの中央部あたりより須恵器片が検出された。II号も最近までゴミ穴に使用されたらしく二〇糶の厚さでゴミが堆積し、しかも横穴入口が切通しを作る掘削作業の為、前半分が削られていた。床面より鉄片が数片検出された。午後五時作業終了。

六月廿九日雨 学生七名九時作業開始、II号土砂排出作業終了、床面には何等の遺物・施設は認められない。午後より実測を行う。I号は内部の土砂約五〇糶を取除くと略中央部に直刀片・鏝片・須恵器破片を床面上より発見、更に、玉砂利一〇糶が敷きつめてあるのを確認した。実測を開始する。六時作業終了。

六月三十日曇 学生十二名九時作業開始、I・II号の



第1図 愛宕山附近地形図 (×印横穴群)

補測、附近地形の略測、Ⅲ・Ⅳ号の排土作業開始、急斜面で危険の為伐木して土留をし、またロープを張りめぐらす。Ⅲ・Ⅳ号何れも風化の為天井部落下、Ⅳ号土砂中より新しい六一頭分の屍体を発見、更に床面より人骨片検出、また奥壁に作りつけの棺台らしい部分を発見、雨のため午後遺物実測の実査を行う。

七月一日晴 学生十一名、九時作業開始、Ⅲ号内部土砂中より石塔宝珠部出土、Ⅳ号床面清掃、Ⅵ・Ⅶ号排土作業開始、Ⅷ号は閉塞状況が良いので一糶の竅を掘く。午後Ⅲ・Ⅳ号の実測を開始する。Ⅷ号も午後に至つて盗掘と判明、六時終了。

七月二日曇 学生六名、九時作業開始、Ⅷ号の排土作業継続、Ⅴ・Ⅵ号はロープで降下し内部の清掃と略測を行う。Ⅷ号も遺物なく実測を行い、一切の作業を六時終了する。

遺跡及びその周辺

本遺跡は神奈川県中郡大磯町大磯一一五二番地、東海道線大磯駅前にある旧岩崎男爵別邸、現ニリサバスサンタースホーム内にある通称愛宕山の中腹にある。愛宕山は大磯山塊特有の凝灰岩質砂岩よりなる独立小丘で、明

治初年までこの上に愛宕神社が興られており、後に岩崎氏がこゝを購入されてからは、神社を現位置に移し、同時に切通しを作られ、国道への交通を便ならしめられたと云う。我々が調査した七基の横穴はこの切通しに面し、その大半は掘削に際し破壊されたものの残骸であつた。(第1図) この横穴群の存在はその頃より知られており、明治二〇年、山崎直方博士によつて報告されている。また地元在住の郷土史研究家鈴木昇氏が赤生直忠氏の指導で、分布図・地名表を作製して居られる。以下これに従つて愛宕山横穴群と呼称する。愛宕山横穴群は標高二〇〇米の愛宕山の所々地崩により切り立つた傾斜三五―一五〇度の西側斜面の表土一〇糶、風化岩層五〇糶の直下にある岩層に當まれ平地比高二・五米―五米の処に二列に二米内外の間隔をおいて北に並んでいる。眼下に見える小学校の敷地より礫生式土器片が出土したと云う以外、この愛宕山よりは現在の所、横穴以外の遺跡遺物の存在は知られていない。

横 穴

便宜上表示すれば次の如くである。(第2表参照) 以下若干の説明を加える。

第2表 愛宕山横穴群分類表

	I		II	III	IV	V	VI	VII
	cm	cm	cm	cm	cm	cm		cm
玄	長径	209						300
	短径	220	260	160	220	310		160
	高	160		120	150			110
室	平面	隅丸矩形	隅丸矩形	羽子板形	隅丸矩形		隅丸矩形	羽子板形
	断面	蒲鉢形		蒲鉢形	蒲鉢形			蒲鉢形
羨	長径	80						
	短径	40						
	高	70						
	断面	卵形						
道	開口	圓形						
	開口	圓形						遺付
方位	N-45°-W	S	N-93°-W	E	N-78°-W	N-5°-E	N-65°-W	
出土品	須恵器	塔破 2片						破片
	鉄器	直刀 2 刀子 2 鍬 4		破片				
品	人骨	破片			破片			
	貨幣	寛永通宝						

相模大磯町愛宕山横穴調査報告 (中川成夫)

七七

第1表 大磯町横穴分布地名表

名称	数	出土品	名称	数	出土品
善福寺	12		立野	13	
滝の沢	7		穴虫	2	
後谷原南	9		谷戸口	2	
北	10		谷戸	2	
南井戸窪	4		高平谷口	14	
石切場	10		高平	3	
楊谷寺	16		本郷山	18	
宝珠山	3		金久保北	6	
玉城山	14		南	13	
坂田山	7		辻の端	10	
招仙閣	?	直刀	城山	16	
駒前	5	直刀, 須恵器	猫の内	1	
愛宕山	7	直刀, 須恵器	火葬場	3	
南中尾	9		南	6	
北中尾	5		吉田氏邸内	7	
善兵衛池	5		高麗神社裏	3	
清水北南	14	直刀, 銅鏡, 須恵器	前野原	17	
南	4		裏前野原	6	

相模大磯町愛宕山横穴調査報告 (中川成夫)

七六

- (1) 構造を良くのこしているのは、I・VII号のみで、他は何れも切通し掘開の際に破壊されたらしい。
- (2) I号底面にはY字状の溝があり玉砂利が床面一面に厚さ一〇糎に敷かれていた。溝は技術の拙さを示すものか、或は排水のためか不明である。天井に巾三糎のノミ痕が見られた。遺物はすべて破損散乱して、原位置を示すものはない。寛永通宝は流入土中よりの採集で混入である。
- (3) II号の残存部略中央に五〇×三〇糎、深さ一〇糎の方型ピット、及びその左右とも見られる五〇×三〇糎、厚一五糎の石があつた。横穴と同時代の構築か否かは不明である。もし同時代のものですれば火葬骨でも納めたものであろうか。
- (4) VII号入口には風化した岩層部分を掘り残し、その部分に

石がつめてあり、閉塞状態を良く示していた。然し内部に近世の陶器があり盗掘されたらしく、遺物はなかつた。(第2図参照)

出土品

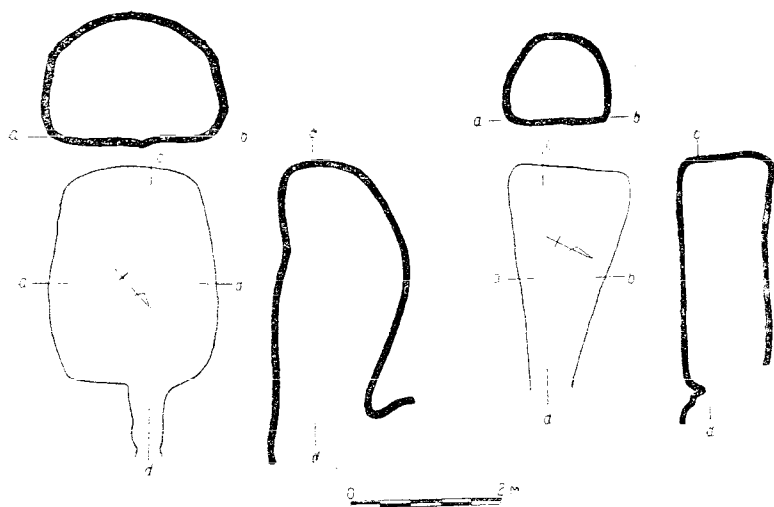
金属器

直刀 A(第3図1) 身長六二糎、身幅三糎、背幅〇・七糎、茎残存長四糎で、厚さ二糎、長さ七・五糎の倒卵形無窓の鐔が付いていた。

直刀 B(第3図2) 身長六三糎、身幅三糎、背幅〇・七糎、

刀子 A(第3図3) 身長一五・五糎、身幅一・三糎、背幅〇・四糎、やゝ反りを有する。

鉄鍬 三個分(第3図4) 何れも有茎揚挾



第 2 図 横 穴 (左 1 号、右 2 号)

五角形式のもの。
 刀子 B (第 3 図 5) 柄部のみ残存、鹿角製装具を付している。

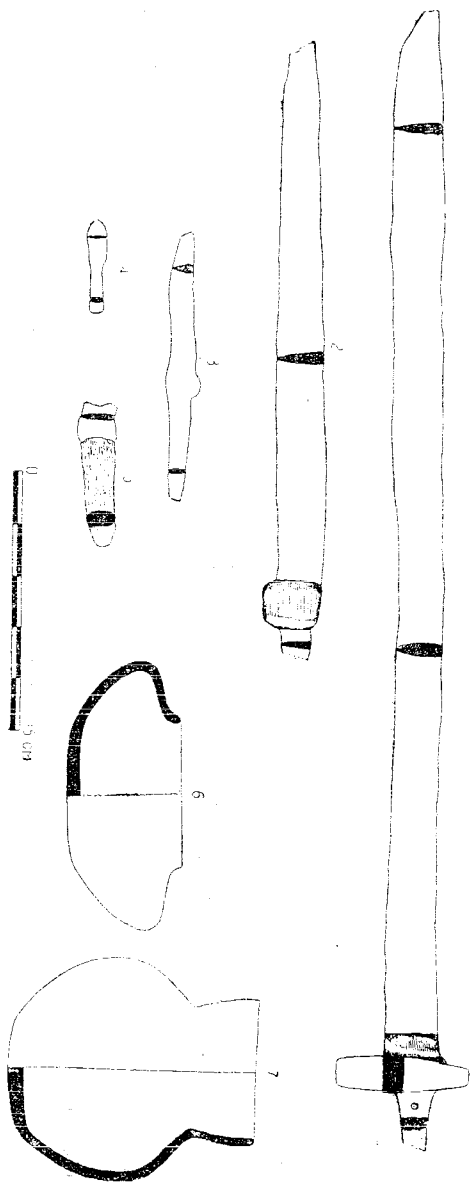
須恵器

埴 (第 3 図 6) I 号床面より破片で出土し、薄鼠色、高七纏、口径八・四纏、腹径一五・五纏、非常に胴の張つた形をなしている。
 埴 (第 3 図 7) 同じく I 号床面より出土、薄鼠色、高一四纏、口径八・二纏、腹径一三纏。

結 語

以上が本横穴群の概要であるが、先ず構造より見て、此等は何れも家型より発展した横穴系列の内でも退化形式に属するものであり、赤埴氏の大磯地方に於ける横穴形式編年によれば、I 号は氏の云う H、VII 号は J 系列であり、何れも末期に属するものである (第 4 図) 次に副葬品より見て、須恵器・直刀・鍔など何れも後期古墳以降に見られる通有のものである。従つて此等を奈良朝末期以降の所産とする赤埴氏の言は妥当であらう。

由來、大磯は倭名抄の餘綾郡の伊蘇郷、或は磯長郷に比定され、中世に於ては「富之庄」に属し、源平盛衰記・平家物語・東鑑等にその地名が現れる。この海辺一帯は

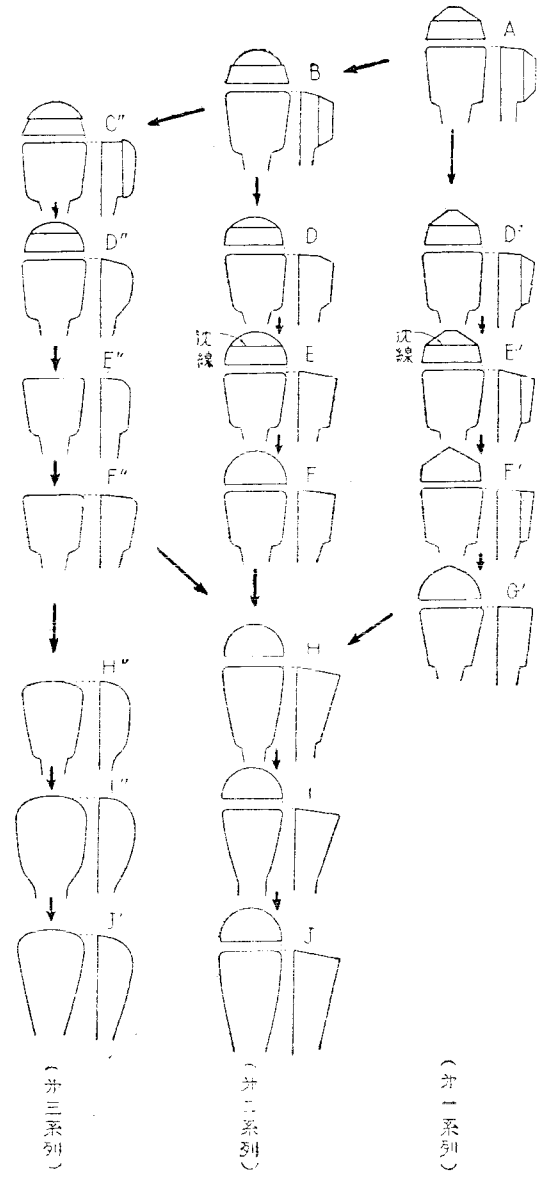


第 3 図 出 土 遺 物

古來より諸越原・唐ヶ原等と称せられ、また高麗寺村・高麗神社等の名が新編相模風土記稿に記されている。然し乍ら此等の横穴群についての記載は同書中には見当らず、僅かに高麗寺村の内に虎子釜の名で釜口古墳、及び山下村の内に文塚の記載があるにすぎない。続日本紀によれば「靈龜二年五月、駿河・甲斐・相模・上総・下総

・常陸・下野の高麗人一七七九人を武藏國に移し高麗郡を置く。」と云う記事がある。恐らくこの横穴群も相模の高麗人の子孫の営造したものであらうか。最後に図版作製に協力された平学々生、館野貞夫・小林章泰の両君に謝意を表するものである。(一九五五)

註(1) 地理調査所、五万分之一地形図、平塚 参照。



第4図 末期横穴様式変遷図例案 (昭和29. 7. 赤星)

- (2) 山崎直方、大磯町近傍にある横穴塚穴の話 (地理学雑誌 昭和29年11月号)
- (3) 大磯町、先史原史時代の火竈、附表
尙第1表はこれを補訂したものである。
- (4) 赤星直忠、逗子市山野根横穴群 (神奈川県立歴史博物館報告 第一集)
- (5) 赤星直忠、横穴の編年について (日本考古学協会発表 昭和29年11月号)
- 新編相模風土記稿 卷三十九-四十一 海綾郡
赤星直忠、神奈川県大磯町釜口古墳 (同上)